

# 琉球大学学術リポジトリ

## 講読を通じた異文化理解(その二)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2008-07-03 キーワード (Ja): 異文化理解, 近代的自我, 贈与と交換 キーワード (En): crosscultural understanding, modern ego, gift and exchange 作成者: 石原, 嘉人 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/6578">http://hdl.handle.net/20.500.12000/6578</a>

## 講読を通じての異文化理解 (その二)

石原 嘉人

## 要 旨

小論は、異文化を画一的、固定的なものとして学ぶのではなく、多角的且つ柔軟に理解する方略を身につけられるような講読のあり方を、2002年と2003年の前学期での実践に基づいて追求した「講読を通じての異文化理解 (その一)」の続編である。

国家や民族という枠組みを前提にしたテキストを多く用いた (その一) と異なり、本論では個人の内面を扱ったテキストが中心となっている。主なトピックは、近代的自我、無意識、歴史認識、贈与と交換、といったものである。近代化された社会において、個人という単位を成立させることが、個々の人間にとってどのような影響を及ぼすのかを読み解くことが全体を通した一つのテーマとなっている。

キーワード：異文化理解、近代的自我、贈与と交換

## 0. はじめに

『講読を通じての異文化理解 (その一)』では、02年度と03年度の前学期に行なった授業における実践活動についてまとめた<sup>(1)</sup>。小論はその続編として、02年度と03年度の後学期授業の内容とその狙いを整理するものである。

前学期の「日本語V」と後学期の「日本語VI」は年間を通して一つのまとまりを持った授業として準備したものであるが、学期ごとに単位認定を行なっていることもあり、受講生の中には継続して受講するものもいたし、「日本語V」を受講せずに「日本語VI」を履修するものもいた。

前学期「日本語V」では、「他者に向ける眼差し」「他者から向けられる眼差し」を通して、近代社会を形成する上で自明のものと見なされがちな「国家」「民族」といったものを相対化する視点を備えたテキストを選んだ。それを受けた後学期「日本語VI」では、個人の内面に踏み込んで「近代化された自我」そのものを相対化する視線を基軸に置いたテキストを選択した。

## 1. 近代的自我

前学期「日本語V」で最後に講読したテキストは、田口ランディの『縁切り神社』であった。このときには、日本人の一般的な宗教意識について、以下のように簡単に説明した。

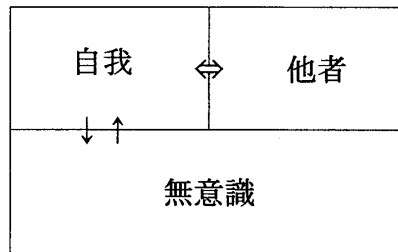
多くの日本人にとって宗教は、「縁」とか「念」といった日常生活に回収しきれない感覚を引き取る場を提供するに過ぎず、婚礼や葬儀など非日常を司る役割だけを期待されている。入信儀礼を行い、日常的に祈り、個人を律するものとして宗教を信仰している日本人は例外的とあって良い。

受講生の中にはキリスト教、イスラム教、仏教などと日常的に接しているものが少なくなく、宗教を特殊なものと考えていないものが一般的である。そのため、日本人の宗教観について日頃から関心を抱いている受講生は多いようである。そういったリクエストに応じる形で、後学期のテキストとして現代日本における宗教観を扱ったものを講読することになった。結果として、後学期「日本語VI」のテキストとして最初にしたのが、宗教と近代的自我の関係に目配りした評論『殻をかぶった私』（上田紀行）である。このテキストは、日本の若者に語りかける形式をとっており、そのため日本の若者の宗教に対する一般的な意識が照射されている。宗教に対して警戒心や胡散臭さを感じている日本の若者たちに、宗教にもマイナス面ばかりじゃなくて良い点もあるんだよ、というふうに、平易な言葉で語りかけるのである。そのことは、日本における宗教のイメージ（オウム真理教に象徴されるような否定的イメージ）への洞察抜きでは理解できないであろう。こういった事情を行間から読み取ることで、日本の若者たちの宗教観に接近することができるわけである。

このテキストでは、宗教には「自我」への執着から逃れるためのプロセスが備わっていると指摘する。それはつまり「他者との差異によって自分を証明しようとする」「他者との違いを際立たせようとする」「他者との比較において自分の幸せを感じようとする」という、近代社会を構成する単位として確立することが推奨されている「近代的自我」を、相対化させる試みであるといっていよい。収入、学歴、社会的地位など、近代社会においては切磋琢磨して自我を磨き上げ、他者との競争に勝つことを善と見なすような社会のあり方が、卵の殻（他者との違いによって確立される自我）を卵そのもの（本来の生命力）と勘違いさせ、息苦しさや孤独さを強いている、というわけである。

このことは、「差異の束」である言語によって表層において掬いあげられたもの、

つまり「意識」というものが個人の「内面」を規定しているという「近代的自我」のあり方そのものの正当性を、いったん留保することによって、別の価値観を獲得していくプロセスを提示することにつながっていく。言い換えれば、近代社会の構成員として確立を求められるような自我の他に、言語化されない無意識の領域を誰もが有しており、宗教によって得られる「人を生き生きとさせる力」は、自我の力を弱めることで無意識の世界からパワーを引き出す、というふうに図式化できるのである。



近代を生きるものたちは、自明のごとく「自我」というものを獲得するのであるが、それは歴史のなかの特定の時代に、特定の生活様式に合わせて形成されたものにすぎない。合理性と効率を重視する近代社会においては異端的な存在である宗教が果たす役割というものが、上図における「横への意識」を「縦への意識」へと誘うもの<sup>いざな</sup>であることが理解できれば、このテキストを読む目的は、ほぼ達成されたと言えよう。

## 2. 無意識の世界

近代社会を形成する途上では、国民文学というものが形成され、人々は文学作品を読むことを通して「内面を語るための言葉（国語）」を獲得する。そのようにして、個人の内面が言語によって規定されてしまえば、意識の力によって自らの人生を方向づけることも可能になるし、他者との間にコミュニケーションの回路を設営することも困難ではない。しかし、そのようにして「意識」の力が強まれば強まるほど、言語に回収しきれない「無意識」への配慮が乏しくなる恐れがある。

うつろいゆく人々の無意識を繊細な言語表現で掬い上げ、それを小説という形式で表現し、回収するのもまた、現代文学が担う役割の一つであろう。

村上春樹の短編小説『緑色の獣』は、寓意や暗喩に満ちていながら、最後まで謎解きや合理的な解釈を拒んでいるような、奇妙な作品である。登場人物(?)は、主人公と思しき一人の女性の他は緑色の獣だけであり、人間の言葉を話すこの獣は、現実世界に存在する如何なるモノにも似ていない。にもかかわらず、個々の表現は具体的ですっきりとした輪郭とリアリティを持ち、一つ一つの文を理解することは、けっし

て困難ではない。妙に現実味のある「緑色の獣」の存在感はくっきりとつかめるのだが、それが一体何を表象しているのかは、謎のまま残るのである。

この作品をどう解釈するのか、少なくとも筆者にはたった一つの正解というものは思い浮かばない。一人一人の読者が、この作品を読むことで自分の無意識に沈潜し、読み終えた後に現実世界に回帰したときには、現実の位相がちょっとだけズラされたように感じることは、間違いのないところではあるが。

そのため、課題の中心となるのは、「作者が“緑色の獣”に仮託して表現したものは何か」という問題提起に対する、それぞれの解釈を述べあう作業となった。作品が作品だけに、多様な解釈が語られて、お互いを啓発する結果となった。主な解釈は、以下のようなものであった。

- ・主人公の夫（結婚生活が不幸せだから、夢の世界で夫を殺そうとしている）
- ・抑圧されたもう一人の自分。潜在的自我
- ・庭にある椎の樹の化身
- ・片思いしている男性全般を表している
- ・他人への恐怖を象徴している
- ・国際恋愛の相手
- ・階層がとても低い人

どれもみな説得力があり、正しい解釈のように思えるのであった。中には、「この物語には続きがあって、今度はこの主人公が“緑色の獣”に変身して愛する人を訪ねるという順番が待っている。そうやって、この物語は永遠に続く。」という、実にユニークな解釈もあったが、これもまた納得できる見方の一つであると言えよう。

このような作品を読むことは、言葉というものが表象的世界を構成する一方で無意識の世界からのメッセージを汲み上げる機能を有していることを実感させるであろう。それは、前節で言及した「縦への意識」の一つの可能性でもある。

### 3. 歴史認識と自己主張

我々が「近代」という枠組みの外部を認識することが簡単ではないということがある程度理解できたところで、「歴史認識」という、より具体的な問題に取り組む。ここで選んだのは、村上龍と小熊英二の対談『「日本」からのエクソダス』の抜粋である。対談形式のテキストを選択した理由は、堅苦しい内容を読みやすく感じさせ、「先入観で過去を見ること」について関心を持ってもらうことが目的である。例えば、

「みんな『日本』という概念がむかしからあったように思っているけど、江戸時代は長州人とか薩摩人だったのが、黒船の来航によって日本人を発見したということですね」

「十六、七歳の...人間が、毎日そろって“学校へ行く”のは、ここ二十年か三十年の現象に過ぎません。それがあたかも何万年も前から続いているかのように前提して、不登校の増加に対して世の終わりみたいな反応をするのは、やっぱりちょっとおかしいですよ。」

等、具体的な例を挙げつつ、話し言葉でわかりやすく歴史認識の倒錯を指摘しているため、内容を理解することは難しくないようであった。

対談形式のテキストを選んだ理由は、堅苦しい内容を読みやすく感じさせること以外にもう一つある。たとえば、村上の作品に対して小熊が「煽り過ぎ」を危惧していると批判を行ったのを受けて、

村上：ただ、そこで、日本の変化の良い部分を前面に出しちゃうと、ちょっと輪郭が曖昧になるんですよ。

小熊：たしかにそれはそうだ。やはり物を書く時には、ある形をもたせて描かなきゃなりませんから。私も自分が著作を書く時には、そのへんは苦労しました。

村上：アメリカのハリウッドの悪役が簡潔なように。

小熊：たしかにそれは難しいところですね。先程の話でいえば、音の塊りだけじゃだめで、どうしても背後にブルースコードを入れないといけない(笑)。

村上：ただ、だれに向かって言うかということ違ってくると思うんですよ。

(略) そういう戦略性は僕の中にあると思います。

小熊：それはすごくよくわかります。ただね、.... (略)。 <傍点筆者>

というやりとりが展開された部分である。

一般的に、日本的な対談の形式では、対談相手との対立点をできるだけ回避し、調和を保ちつつ控えめに自己主張する傾向が窺えるが、ふだん直截に(時には辛辣に)他者への批判を行うこの両人であっても、対談相手に対しては、

- ・「たしかに」「それはそうだ」等の受容のサインを頻繁に送る
- ・緊張を和らげるためのジョークを入れる
- ・反論する際も、否定を前面に押し出す「しかし」ではなく、肯定した上での留保を表わす「ただ」を選択する

というふうに、細やかな配慮を欠かさない。

こういった眼前の対話者に対する言葉遣いと、自書で展開する主張の明晰さと読み比べてみることも、ひとつの訓練として役立つであろう。

この続きとして、専門用語が用いられたかなり難解な『単一民族神話の起源』(小熊英二)の、日本と中国・韓国の家族制度の違いについて書かれた部分を読ませた。要約すると「旧日本が掲げていた同化政策は、血統を重視しない日本式の養子縁組を下敷きにしたものであり、それは異姓不養の原則を持つ人々には理解不能であった」という内容である。

具体的には、日本では「イエ」という生産単位において父系血統はさほど重視されず、明治時代の高官や知識人にとって「姓を変え、養家の家風に染まる」ことは身近であった。「自らの出自を忘れ、与えられたイエに忠孝を尽くす」ことを疑問視せず、養家の名を上げるために立身出世を志した人々が、沖縄や台湾、朝鮮等において行った同化政策は、日本におけるこういった文化的背景を自明視して打ち出したものであったため、彼らが予期していた以上の抵抗を招いた、ということである。

旧日本の政策に対する批判については、ほとんどの受講者が知識として持っている。しかし、それは画一化されたストックフレーズであることが多く、実感を伴わないで言葉だけが上滑りしてしまうケースも少なくない。その結果、「侵略者」「日本鬼」等というイメージと、日頃接する日本人たちへの印象が乖離して、歴史へのリアリティが感じにくくなってしまふ恐れがある。

それに対して、このテキストの考察は、うっかりすると共有概念として処理されかねない「家族」や「血統」のような言葉の背景にある認識の違いが、どのような軋轢をもたらすかということをも具体的に論じており、そのことが現代においてもなお、パーセプションギャップの温床となりかねない身近な問題であることを意識させる。言い換えれば、同じ言葉で異なる概念を指し示すことで生じた「行き違い」が、解消されないまま現在まで受け継がれ、うわすべりを続けていることが実感できるのである。

「不幸な歴史」等というストックフレーズで過去を封印してしまうのではなく、国内で通用した手法を無自覚のままに異文化圏に対して敷衍させようとした過去の姿勢を検証し、当時の日本社会が異文化に向ける眼差しを欠如させていたことが何をもたらしたのかを学ぶことは、日本に留学することの意義として挙げるに値するだろう。

更にいえば、沖縄という「日本に併合された」歴史を持つ地で、日本による同化の論理を検証することは、格別の意義があるのではないだろうか。このことは、台湾や韓国からの留学生にとっては過去を身近に感じる契機となったようで、いわゆる「琉

球処分」前後の歴史をもっと知りたいという声が上がった。時間的な制約のため、授業中に扱うことはできなかったが、高等学校の歴史教科書の「琉球処分」関連頁<sup>(2)</sup>のコピーを配付して、自習させた。

#### 4. 贈与と交換

宮澤賢治を取り上げたのは、02年度の春学期に日本語Vを受講した学生のうちの一人が「講読したい作品」としてリクエストしてきたのに応じてのことである。宮澤の作品は、花巻地方の方言や当時の時代背景に関する説明抜きでは理解できないが、筆者にはそのどちらについても知識が足りない。そのため、作品そのものを読ませ、それをテキストとして逐語的に解説することは断念し、「雨ニモ負ケズ」「春と修羅」「永訣の朝」等の詩<sup>(3)</sup>を朗読してその大意と宮澤の略歴を紹介した後、『哲学の東北』（中沢新一）の冒頭部分「贈与する人」を解説のためのテキストとして読ませることにした。

このテキストを選んだ理由は、近代的自我のありようを分析し対象化した前掲の「殻をかぶった私」の記述と重ね合わせて理解できる部分があり、これまでの授業内容と関連させて取り上げることができるからである。さらに、このテキストを敷衍させることで、資本論や聖書、コーランの成り立ちに至るまで緻密に分析し、「贈与」と「交換」という概念を元に、狂牛病やテロリズムに表象される現代社会の様々な危機の源泉を「非対称」というキーワードで掬いあげた『緑の資本論』（中沢新一）の内容に踏み込んで解説することも可能となる。上田と中沢という二つの補助線を引くことで、宮澤賢治を読み解くことと「現代社会」を理解することが結びつけられるのである。つまり、宮澤を「昔の詩人」という閉ざされた枠組みに閉じ込めることなく時代や国境を越えて読み継がれていく存在として紹介することを試みたわけである。

そのような理由でテキストとして選んだ「贈与する人」では、「交換」と「贈与」という二つの対立する概念が語られている。この二つの違いについて、「魂」を引き合いに出して

*魂は商品として、売り買いすることができません。*

とか、

*人の所持品が、もはや魂にかかわる物ではなく、その人から切り離すこともできるようになったとき、はじめてその物は、商品となることができます。*

というふうに説明しているが、ここは解説が必要なポイントである。



「魂」という言葉自体は、どの言語にも類似の概念があるようであり、特に解説は必要なさそうである。「どんなものか」と尋ねたら「見えないけど、人間はみんな持っている」「それをなくしたら、死ぬ」というような答えが返ってくるし、更に「人間だけ？」と問いかけると、「いや、生きているものはみんな持っている」「死んだ後も残っているのは、お化けだ」等、一般の日本人の感覚に近い返事が返ってくる。

では、物にも魂が宿るのか？

この問いには、かなりの受講者が首を傾げ、返答に躊躇する。

そこで、近代以前の日本に存在した「物の怪（もののけ）」という概念を紹介し、貨幣が成立する以前のアニミズム的感覚について解説する。

すなわち、こういうことである。かつては食べる物も身につける物も、「どこのだれが作ったかわからないもの」ではなく、素性の知れたものばかりであった。長らく使用している物には「物の怪」がついているし、また自分を憎む者が自分の衣服等を用いて呪いをかけることもあったため、簡単に手に入れることも捨てることもできなかった。「針供養」のような現在も続けられている行事に、その感覚が伝えられている。

市場の由来として「いったん神仏に奉納された物を受け取る」という形式が好まれたこと、貨幣の流通と「物の怪」の消滅を関連づけ、「交換」という概念が人類にとって大きな飛躍であったことを指摘し、更に、現代人でさえ「物の怪」感覚から自由ではないことの証左として「手編みのセーター」と「ブルセラショップ」の例を紹介した。

「手編みのセーター」が、買ったセーターと違って捨てたり交換したりしにくいことは受講生たちも実感できるようであったが、「ブルセラショップ」については若干の説明が必要だった。既に過去の話題となりつつある「ブルセラショップ」の成立には、若い女性の下着をモノ以上の価値として欲しがる男性と、それを交換可能なモノとしか見ていない若い女性の意識のギャップが不可欠である。つまり、下着を売る女性にとってそれは単なるモノに過ぎないが、欲しがる男性にとってそれは所有していた女性とのつながりを意味しているという認識のズレが存在するのである<sup>(4)</sup>。

このようにして、同じ時代に生きている者でさえ貨幣経済の浸透度の違いによってこのような認識のズレが生じていることを物差しにすれば、市場経済を自明のものとして生きる現代人にとって視えにくくなっている「魂」が、かつては日常的に存在しえたこと、またそれをありありと感知する詩人が存在していたことも、不可思議なも

のではなくなってくる。

では、なぜ宮澤賢治は近代化が推し進められていた大正時代の日本にあって、しかも科学への深い関心を抱く当時の先進的なインテリでありながら、土俗的な伝統に埋没しかねない「魂」の存在を感知しえたのであろうか。それは、彼自身の生き立ちや性向もさることながら、東北という文化的な土壌を抜きにして語ることはできない。そこに日本の支配原理として君臨してきた「稲作文化」とは異なる、縄文的（あるいはアイヌ的）な文化が存在していることは疑い得ないのである。

授業では、東北には沖縄と同様に日本の多様性を裏付ける文化が存在することを指摘するにとどめ、「贈与」と「魂」の関係に踏み込んでいく。

## 5. 非対称的關係

中沢は、「贈与」と対立するものとして「商売」を位置づけ、商品の成立には人と物、人と人とを分離する「ロゴス」の力が働いていると述べている。その上で、これと対置されるべき「贈与」には、「エロス」の力が働いていると主張する。

「ロゴス」も「エロス」も、日常的に使用する語彙ではないし、辞書的な解釈だけではこの文脈にそぐわないが、これについては、前掲「殻をかぶった私」の記述がヒントとして活用できる。

つまり、「ロゴス」というのは「差異」によって成り立ち、自己と他者とを切断するものであり、その逆に「エロス」は自他の境界線を突き破って接続させるものである、というふうに対置させれば、理解は容易になる。他者と融合することで自我の障壁を消滅させる感覚が「エロティック」と呼ばれるものであり、性的なもののメタファーとして使われることが多いが、もともと自意識（ロゴスによる軛）から自由になる感覚を「エロスの」と広く呼ぶことができるのだということを理解すれば、こういった言葉遣いを把握することは困難ではない。

釈迦が自らの肉体を虎に与えたという故事を引き合いに出すまでもなく、仏教には自意識を解脱すること＝贈与を具現化することを思想として持っており、それは全ての生命に対して惜しみなく注がれるものである<sup>(5)</sup>。

たとえば、マタギが熊を仕留めたときに、それを「森からの贈与」として感謝の念を抱くとともに、熊自身にとってかけがえのない生命を奪ってしまう痛みを感じるものが、エロスの力を感じていることにつながっているのである。逆に、人間と動物とを切断させてしまうロゴスの力を信奉する立場に立てば、熊を、商品としての毛皮や

肉や胆といった存在として扱うことになる。

ここまで解説した上で、宮澤の作品に通低する「贈与」の感覚について説明を加えるわけであるが、それがもっともわかりやすいテキストとしては、自然界からの贈与に関する作品を挙げるのがふさわしいであろう。とはいえ、「春と修羅」に代表されるような詩はあまりにも難解であり、「なめとこ山の熊」のような童話にしても辞書で調べられないような語彙が多いため外国人にとって読みやすい文章とは言いがたい。しかも、沖縄から見て自然環境的にも文化的にも隔たりが大きいいため、花巻方言や当時の東北地方の生活の細部に拘泥するだけの必然性は希薄である。

そこで、宮澤作品を平易な文章で再構築して、より普遍的な解説を加えた『熊から王へ』（中沢新一）の冒頭部分で紹介されている「氷河鼠の毛皮」を、もう一つの補助線として適用することにした。宮澤の作品群には、圧倒的な弱者の地位に甘んじている動物が人間に向かって発するメッセージをテーマにした作品がいくつか存在するが、「氷河鼠の毛皮」では、そのような〈非対象〉の図式がいつそう明らかに示されているのである。

この物語は、虐げられた弱者（野生動物）が、圧倒的な武器の力で〈奪う－奪われる〉という非対称的な関係を構築した近代人たちに向かって、最後の抵抗としてテロを行うという図式を持っている。まさしくそれは圧倒的な近代兵器をかざして一極支配を目論む米国とアラブ諸国に代表される伝統的な社会に生きる人々との関係に重ね合わせることができる。

かつて狩猟民たちは自分達と狩りの対象である動物たちとの間に対称性を構築し、維持するための神話や儀礼を保存してきた。そこには、自らが生きるためとはいえ、命を奪った相手への敬虔な心情が込められていて、殺戮は儀礼に沿って進められ、亡骸といえども疎かにすることは禁じられていた。伝統的な社会には、今もそのような感性が残されている。一方、近代化された社会では、殺戮は機械的に行われ計量化され、生産効率のために草食動物である牛に共食（餌に肉骨粉をまぜること）さえ強要している。その結果として生まれた狂牛病もまた、圧倒的な弱者が最後の手段として訴えた自爆テロの一つと言えるのではないか。中沢はそのような角度から「氷河鼠の毛皮」を解説する。

この物語では、武装した動物たちが、近代式の銃によってスポーツ感覚で動物を殺し、毛皮のコートを身にまとってぬくぬくとしている人間たちの乗った列車を占拠してしまう。そして、宮澤自身の分身のごとき貧しい身なりの青年の口を借りて「きさ

まらのしたことは尤もだ」と語らせ、進化した武器による一方的な殺戮の非を認めた上で「あんまり無法なことはこれから気をつけるように云うから今度はゆるして呉れ」と謝るのである。

この言葉は、生産動物として効率的に飼育され機械的に屠殺されるようになった生命への謝罪として読み取ることも可能だし、イラクの伝統的な部族社会を武力によって無理やり解体させ、だれもが同じ一票を持つ均質な国民を形式的にでっちあげたことを民主化と称して石油供給の安定を目論む米国石油業界の人々（と、その利権を持つ政治家たち）への警鐘として読み取ることも可能である。

このように、宮澤は時代に制約される過去の牧歌的な作家などではなく、現代社会を覆うさまざまな問題群の中心を貫く視座を備えた普遍的な作家として捉え直すことができる。それは、「近代化＝均質化：かけがえのないものが交換可能な存在に転化されていくプロセス」を、踏み止まって見つめなおすことのできる視点である<sup>(6)</sup>。

## 6. まとめ

この授業で取り上げた教材は、どれも外国人留学生が講読することを想定した文章ではなく、ほとんどの学生にとってかなり難解な語彙や言い回しが多く用いられている。しかし、明確な問題意識を掻き立てながら、「日本語を学ぶ」のではなく「日本語で学ぶ」ことの手応えを感じられるように配慮することで、その困難さを乗り越えることは可能である。その試みの一つとして、この報告をまとめた次第である。

## 註

- (1) 石原嘉人(2003年)「講読を通じての異文化理解 (その一)」『留学生教育』第1号 琉球大学留学生センター, 51-70
- (2) 新城俊昭(2001)『高等学校・琉球沖縄史』東洋企画, 148-152
- (3) これらの詩は、高校教科書『新編現代文 I』(大修館書店, 65-69) やホームページ <http://www.ihatov.cc/> から引用した。
- (4) このような感覚が更に進み、化粧やダイエットへの過度の関心によって身体さえも外部化された感覚を持てば、身体接触を貨幣と交換する「援助交際」へと進むことが理解できる。近代化＝貨幣経済(均質化された単位相互の交換が常に成立するという認識)の浸透が、「かけがえのない(交換不能な)もの」への認識を希薄にしつつある現状が、そこから浮かび上がってくる。

- (5) 宮澤賢治と仏教思想の関係については筆者には解説するだけの知識がなく、「近代主義のベースとなった西欧的（キリスト教的）価値観における人間と人間以外の動物との関係との対比を示すにとどめた。
- (6) もちろん、このような解釈は、日本における宮澤賢治の標準的な解釈とは異なるものであり、そのことは指摘しておかなければならない。そこで、授業の締めくくりに、かなり穏当に宮澤賢治を評した井上ひさしの「賢治は人間の手本である」も紹介しておいた。

#### 参考文献

- 柄谷行人（1990）『マルクスその可能性の中心』講談社学術文庫  
宮台真司（1994）『制服少女たちの選択』講談社  
中沢新一（2002）『緑の資本論』集英社  
西田良子編（1992）『宮澤賢治を読む』創元社

#### 教材の出典

- 上田紀行（1989）『覚醒のネットワーク』カタツムリ社, 24-43  
村上春樹（1999）「緑色の獣」『レキシントンの幽霊』文春文庫  
村上龍, 小熊英二（2001）「日本からのエクソダス」『存在の耐えられないサルサ』文春文庫, 148-154  
小熊英二（1995）『単一民族神話の起源』新曜社, 377-380  
中沢新一（1995）「贈与する人」『哲学の東北』青土社  
中沢新一（2002）『熊から王へ』講談社メチエ, 26-34  
井上ひさし（2002）「賢治は人間の手本である」『宮澤賢治に聞く』文春文庫

（琉球大学留学生センター）

## Improving Crosscultural Understanding through Reading Strategies (2)

ISHIHARA, Yoshihito

**Keyword** : crosscultural understanding, modern ego, gift and  
exchange

### Abstract

This study is the sequel to "Improving Crosscultural Understanding through Reading Strategies (1)", which has suggested how to teach learners of the Japanese language reading strategies to understand cultural diversities through texts and to evaluate different cultures critically and flexibly.

Unlike part 1 which dealt with texts concerning with nation or ethnicity, this study focuses on problems with teaching texts concerning the inside of modern people such as modern ego, unconsciousness, understanding of history and "gift and exchange". The main purpose of this study is to lead students to understand what effect the birth of "modern ego" have had on us in modern society.

(University of the Ryukyus)